平成23年度

慶應義塾大学入学試験問題

法学部

地理歴史（日本史）

注 意 1. 指示があるまで開かないこと。

2. 解答用紙のそれぞれ指定された箇所に氏名と受験番号を記入すること。受験番号欄には忘れずマークすること。

3. 解答は、必ず解答用紙の指定の欄にマークすること。

4. 解答用紙（マークシート）の解答欄にマークするときには、すべてHBの黒鉛筆を使用し、また、次の解答例に従うこと。

（解答例）（1）（2）と表示のある問いに対して、「00」と解答する場合は、右に示すように解答欄（1）の○と（2）の△にマークすること。

5. 下書きの必要があれば、問題冊子の余白を利用すること。解答用紙の余白には何も書いてはいけない。

6. この問題冊子は9頁ある。試験開始後ただちに落丁、乱丁等の有無を確認し、異常がある場合にはただちに監督者に申し出ること。
問題 I

次の本文と、本文中の下線部（ア）〜（オ）に関する文章を読み、空欄（1）〜（25）〜（28）に入る最も適切な語句を該当より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。

多様な食生活が営まれる現代においても米を主食と感じる意識が私たちは失うことはないと考えた農耕社会を形成した人々といえよう。稲作が発展した時期には諸説あり、たとえば、佐賀県唐津市にある（1）〜（2）遺跡では縄文晩期の水田跡が発見されているが、水稻耕作が本格化したとみることができる弥生期である。弥生後期の農業集落遺跡である登宮遺跡からは、畑・水路によって区画された水田の遺構が出土し、平穏、食、田下駅などの水産農具が数多く発見された。

弥生期の米は粥や雑炊にして食べられていたと推測されている。炭化米が付着した土器が発見され、登宮遺跡からは木匙も見つかっている。古墳時代の頃より、一種の蒸籠である（3）〜（4）を用いて、米を蒸して食べるようになった。遺跡に隣接し入倉の経験をした花岡氏男が筑前守を辞して上京後、最初に読んだ（5）〜（6）には、「酒には、火気ふき立てず、（3）〜（4）には、銅鉄の器織され、飯炊く、飯も忘れて」とあるのが見える。出雲の日には小豆を穂日に混ぜて蒸した白飯を食べる風習が今日に伝わるが、当時の蒸した米は硬く、食べやすいとは言い難かったという。次第に、米を煮炊きする調理法が伝わったようになる。やがて、稲作が本州全域に行き渡り、米が常食化した室町時代末には、これが一般的な調理法となる。戦後比叡山本坊の僧侶の藤原秀顕の著した「（7）〜（8）」には、「白米を能く洗いにきむりとぎて、蒸らたくし、五に煮湯をわかして米を入、出汁をして、一沸して薪を減じ、火をやわらかにたき、能く熟しなたらん。蓋を開く。いまだ熟さざる内に、蓋を開く時なれば」と、米の炊き方が記されている。

日本の食文化が形成されてきた過程は、茶の存在なくして語れない。茶の伝来は古く、平城京、平安京の頃には貴族や僧侶が飲んでいたと伝えられているが、茶を嗜む風習は鎌倉時代後期に急速に広まった。南宋に留学した源氏は茶の種を持ち帰り、筑前国清風山に植え、山城国嵯峨野における（9）〜（10）は茶畑から種を譲り受け、茶畑を江戸百草に取り組んだという。当時の茶は茶畑の色彩が強かった。安楽坊（8）は「喫茶養生記」の冒頭で「茶は養生の仙薬なり。延縁の妙術なり。山谷之を生らば其の地神華なり。人倫學を揉ませば其の大人向上なり」と説いている。

茶は穏とつながり、修行としての喫茶から、やがて茶を静かに喫する茶の湯へと変化した。（11）〜（12）は茶禪一味の境地を会得し、「此の道、第一要事は、心の安らか我情」と説くその精神は、商人の町・蛻の繁栄とともに彼の地の歴史に受け継がれ、和茶が完成した。

このような茶道の発展にともなって、懐石料理という新たな食事様式が起こった。「懐石」とは、禅僧が修行の際に懐石を身に掛けて寒さををしのいだことに由来する。懐石料理は懐石に似ているとも言えるボルトガルのイエズス会宜教師（13）〜（14）は、米善の見物を著し、横浜港率のキリストの動向や日本の社会の様相を詳しく伝えた。そこには「細い管で編んだ座敷団に坐ると、懐で食事を食う。日本はものの出来ない土地で、食物は手に汗を流す者」とする。懐石料理は、もともと一汁三菜の精進料理が、禪風の質素を残しながらも、洗練され、てなしの料理として茶席に供され、日本料理の主流を占めるようになった。

（ア）天皇はその年の秋に収穫された新穀を献じて天照大神や天神地祇を祀り、みずからも食して安寧と五穀豊穣を祈念する儀式を行う。なかでも、天皇が即位した後にはじめて行なわれるその儀式は、ときに（15）〜（16）と呼ばれ、皇位継承に伴う一に一柱限りの重要な儀式である。これらの儀式は、種作農業を中心とした日本の社会に古くから伝承されてきた農耕儀礼に根ざしたものといえよう。

（イ）中世には一つの耕で米と麦を交互に作る栽培法が普及し、なかには米、麦、そばの三種を栽培する地域もあった。応永の内戦後、国礼使として派遣された（17）〜（18）は、帰国後、『老松堂日本行路』を著し、
「日本の農家は、秋に収穫して大豆を種き、明年初夏に大豆を割り苗を植え、秋に収穫して大豆を種き、冬に普通を割りにして大豆を種く。一畑に一年三畑を種く。乃ち川原がれば則ち壷と為し、川決すれば則ち壷と為す」と伝えている。

(ウ) 平安初期に編まれた書状書である「(19) (20)」弘仁6年4月22日条には「大僧都永忠、手自を煎じて奉賜す」とあるのが見え、嵯峨天皇に茶を献じた記録が残されている。

(エ) 大陸から伝来した食べ物には、その当時、薬として使われていたものも多く、甘味料の類もその一例と考えられていた。『唐大和上行征伝』には、「(21) (22)」一級の堆積のなかに「石蜜、蔗糖等、五百餘斤。蜂蜜十斛、甘蔗八十束」があったという記録が残されている。

(オ) 鎌倉時代初期には、食と健康に関する書物が大いに見られようになった。たとえば、鎌倉初期から南北朝期の二条家を代表する僧侶は「(23) (24)」著し、貴族社会の動静や幕府の暮らし、風習を知るうえで貴重な情報を伝え、病人の身に止まることを得ずして喫む所、第一に食事、第二に睡眠、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず、飢餓ず、寒さず、風雨に侵されずして、閑かに過すを楽しみとす」と随筆にしたためた。また、手拭いの形態をとって編纂された「(25) (26)」と呼ばれる子ども向けの教科書のなかには、「食物の配列、(中略) 深遠の夜食、五更の空腹、塩飴の飲斗、締めの熱湯」を避けるべきことと説くものもあり、当時の子どもたちに対する食育の様子を垣間見ることができます。

【語群】

<table>
<thead>
<tr>
<th>01. 相待祭</th>
<th>02. 東歌</th>
<th>03. アントーニオ＝ガルパン</th>
<th>04. 板付</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>05. 今井宗久</td>
<td>06. 伊呂波歌</td>
<td>07. 散尊</td>
<td>08. 往来物</td>
</tr>
<tr>
<td>09. 大伴古麻呂</td>
<td>10. 翁問答</td>
<td>11. 織田有斐斎</td>
<td>12. 御伽草子</td>
</tr>
<tr>
<td>13. オルガンティーノ</td>
<td>14. 海遊記</td>
<td>15. 鍔真</td>
<td>16. 神宮祭</td>
</tr>
<tr>
<td>17. 視労</td>
<td>18. 祈年祭</td>
<td>19. 行基</td>
<td>20. 玄昉</td>
</tr>
<tr>
<td>21. 広益国広考</td>
<td>22. 猴</td>
<td>23. 古事記</td>
<td>24. 防人歌</td>
</tr>
<tr>
<td>25. 山家集</td>
<td>26. 沙石集</td>
<td>27. 貞慶</td>
<td>28. 統日本記</td>
</tr>
<tr>
<td>29. 諸日本後紀</td>
<td>30. 粟物類纂</td>
<td>31. 沈惟敬</td>
<td>32. 観鶴</td>
</tr>
<tr>
<td>33. 諏撰器</td>
<td>34. 正法</td>
<td>35. 千利休</td>
<td>36. 蘇</td>
</tr>
<tr>
<td>37. 宋希璟</td>
<td>38. 宋貞茂</td>
<td>39. 宋貞盛</td>
<td>40. 相間歌</td>
</tr>
<tr>
<td>41. 大書祭</td>
<td>42. 高杯</td>
<td>43. 武野紹騫</td>
<td>44. 垂柳</td>
</tr>
<tr>
<td>45. 津島江道</td>
<td>46. 津田宗及</td>
<td>47. 徒然草</td>
<td>48. 異元</td>
</tr>
<tr>
<td>49. 意子即</td>
<td>50. 諏首</td>
<td>51. テレス</td>
<td>52. 菜畑</td>
</tr>
<tr>
<td>53. 新春祭</td>
<td>54. 日蓮</td>
<td>55. 日本後紀</td>
<td>56. 日本書紀</td>
</tr>
<tr>
<td>57. 忍性</td>
<td>58. 農業全書</td>
<td>59. 農業全書</td>
<td>60. 土師器</td>
</tr>
<tr>
<td>61. 引歌</td>
<td>62. 百間川</td>
<td>63. 貧窮問答歌</td>
<td>64. フランシスコ＝ザビエル</td>
</tr>
<tr>
<td>65. 方丈記</td>
<td>66. 法然</td>
<td>67. 杉草子</td>
<td>68. 酒狂手</td>
</tr>
<tr>
<td>69. 明恵</td>
<td>70. 無譲亮優</td>
<td>71. 村田時光</td>
<td>72. 奉礼</td>
</tr>
<tr>
<td>73. 大和本草</td>
<td>74. 李参平</td>
<td>75. 李成柱</td>
<td>76. 李通敷</td>
</tr>
<tr>
<td>77. ルイス＝アルメイダ</td>
<td>78. ルイス＝フロイス</td>
<td>79. 連歌</td>
<td>80. 和俗童子訓</td>
</tr>
</tbody>
</table>
問題II

次の本文と、本文中の下線部（ア）〜（ウ）に関する文章を読み、空欄（27）〜（49）、（50）に入れる最も適切な語句を語群より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。

日本は古くより外国からのさまざまな影響を受けてきた。日本が外国から受け入れたものの中には、国の仕組みを根本的に転換させたものや、現在の生活でもその痕跡を見出せるものもある。古代から中世にかけては朝鮮半島、中国大陆からの影響が大きい。たとえば教育は慶應義塾大学に発端し、京都の太秦に寺町を創設した中の祖先が伝えられた。（29）〜（30）天皇の時代には儒教が百済の五言博士によって講じられ、伝わったとされる。また仏教は開明天皇時代に百済の聖明王の使いが仏教を伝えたことで伝えられた。もっとも仏教は開明天皇朝以前からすでに渡来人のあらゆるとは信仰されていき、平安時代に編纂された『扶桑略記』には「天皇即位十六年壬寅、大唐の僧人講部村主司夢止、この年の春二月に入朝す。即ち草堂を（中略）結び、本尊を安置し、帰依礼拝す」との記述が見られる。これらは伝来の時期に関しては諸説あるものの、今でもわれわれの生活、習慣、思想に直接的、間接的に影響を及ぼしている。

16世紀になると、西洋のさまざまな科学やキリスト教などが入ってくるようになった。いわゆる前歴文化といわれるもののなかには、ギズ、天童、カスタラ、シャボンなど日本の衣食住に深く根付いたものもある。通称「種子島」もその製作技術が伝わりと各地で製作されるようになった。「種子島」の製作地は江戸時代まで存続したが、（31）〜（32）もそのひとつであった。雑賀衆などと共同行動をとることが多かった（31）〜（32）衆は「種子島」を製造していたが、彼らは豊臣秀吉に抵抗し、弾圧されたため、いったんは壊滅的な状態に陥った。

キリスト教は江戸時代の初期を巡った武将が好意的であったこともあって各地に広まっていったが、これは仏教対策のために保護した面があった。事実、この武将は自ら居城と定めた地で（33）〜（34）と浄土宗と宗教教義を交わして前を抑え込んだ。当時の儒学者だった（35）〜（36）の一派と断絶的に争うなど、仏教勢力を排除し続けた。しかしその後、キリスト教は時の支配者の警戒心を呼び起こし、禁教となった。特に鎖国を行った江戸幕府は寺社制度を整え、キリスト教をないすることを証明させるようにして取り締まった。

江戸時代は鎖国政策のため西洋との交流は限られたものであったが、沿岸に西洋列強の船が現れ始めると、日本は西洋の進歩的な国力に圧倒されることになり、国防の必要性と民族意識を持つようになる。徳川幕府は仏教、日光東照宮総裁をとめた徳川親藩の儒者たちは天皇の領収契約に基づく制度総合の思想、そして西洋諸国の侵略に対する防衛を訴えた「（37）〜（38）」を作られた。この「（37）〜（38）」で説かれている思想は、全国の下級官 sistemに大きな影響を与えた。また幕府は海外政策の一つとして、海軍部隊ヴェルニーリの指導の下で（39）〜（40）を作らせた。ヴェルニーリの母国では1867年に万国博覧会が開催され、幕府はこれに参加している。また同国は軍事教育団を日本に送るなど、幕末から明治初期にかけて一定の影響力を持っていた。

西洋からの思想の流れに影響を受けた。明治維新前後に流入してきたもののひとつが、西洋の18世紀の啓蒙思想が説いていた自然科学の思想であり、その理念は日本では仏教仏論の名称で紹介された。明治初年も溟とそして（41）〜（42）は、この仏教仏論を踏まえた主張を展開する一方、国学や儒学の流れを汲む国論学者に批判を加えた。ところが、やがて（41）〜（42）は、進化論思想に基づいた社会有機体論を説くようになり、自ら展開した仏教仏論を否定することになる。他方、仏教仏論は、自由民権運動と結びついて、急進的な植民地政の私権憲法「東洋大日本国国憲法」を生み出すにいたった。

自由民権運動は、政府の従属と内部分裂によって、大同国烈士を最後に衰退してしまった。しかし大正時代、自由民権運動は吉野作造を中心に作られた明治文化研究会によって再評価されることになる。吉野作造は西洋から入手してきたもう一つの重要な概念、デモクラシーを「民主主義」と訳したことも知られる。1916年1月に吉野が『（43）〜（44）』に発表した論文は、かかる思想を象徴するものとして有名であるが、彼は常連執筆者となることで『（43）〜（44）』も、大正デモクラシーを象徴する代表的な雑誌の一つとなった。
（ア）18世紀半ば，ロシア帝国が南下を始めるとき，その脅威について「日本に押し寄せられて，夏間して，冬ぎを鉄錬を計りながら，日本を過半，背中斜めすることあり。」（中略）是等の事実を根拠に考え，さらに「脅威に急べば江戸の日本橋より唐，阿南道楽ざなしの水路也」の認識を示しながら，海防論を説く書が著された。著者に，地実を解説した『（45）（46）』もこの時すでに書っていた。しかしこれら二書は，いずれも発表となったが，この処分の後，ロシアのラックスマンが根室に渡来し，江戸湾入航を求めてきた。

（イ）一般的に明治維新の精神的指導者といわれる『（47）（48）』は，佐久間象山に師事したが，『（37）（38）』の著者とも面会し，大きな影響を受けた。（47）（48）は日米修好通商条約の締結を機に倒幕を目指し，老中要棄を提起したがで獄に捉えられ，獄中で「留魂録」を著した。またいわゆる一君万民論を主張し，門下生の多くは討幕運動の推進力となった。

（ウ）明治初期は国学者や神道家が唱えていた「僧神の道」の理想に基づく天皇親祭，天皇親政が推し進められた。このような思想の理論的支柱の役割を果たしたのが復古神道であり，その起源は江戸時代に興った国学に求めることもできる。仏教や僧教などの外来思想を排除し，日本の古代を理想とした国学者『（49）（50）』は。記紀神話を文献学的に検証する一方，神の道を説いた『直観論』を著した。

[語群]

01. 赤磐英風改造
02. 阿知比主
03. 安原
04. 石川島造船所
05. 児時
06. 宇内関間策
07. 梅田雲渓
08. 大国陸正
09. 大村益次郎
10. 紹方洪庵
11. 海軍伝習所
12. 海嶽兵談
13. 改造
14. 郎放
15. 荷田春満
16. 加藤弘之
17. 藤生君平
18. 寺茂真濤
19. 久坂玄瑞
20. 国友
21. 軍舰操練所
22. 継体
23. 弘道館記述義
24. 国体新論
25. 国民之友
26. 三国通覧図說
27. 山陵志
28. 明宗
29. 淨土真宗
30. 白樫
31. 真言宗
32. 新論
33. 崇峻
34. 西域物語
35. 関口大窪製作所
36. 鳳凰酒
37. 台場
38. 太陽
39. 高杉晩作
40. 高山正男
41. 段階
42. 中央公論
43. 深田真道
44. 天台宗
45. 益都
46. 長崎製鉄所
47. 中村正直
48. 西周
49. 日蓮宗
50. 日本外史
51. 仁徳
52. 陽来
53. 裴世濟
54. 博多
55. 橋本左内
56. 練保己一
57. 反正
58. 敏達
59. 平田篤胤
60. 平戸
61. 福羽美静
62. 文芸春秋
63. 硯後
64. 坊津
65. 戊戌討事
66. 篤作院浦
67. 本居宣長
68. 報有礼
69. 諏訪
70. 弓月君
71. 横井小楠
72. 横須賀製鉄所
73. 吉田松陰
74. 須山三郎
75. 柳子新論
76. 臨済宗
77. 王仁
78. 我等
問題III

次の[1]と[2]の文章は、ある一人の政治家の回想録をもとに作成したものである。以下の本文と、本文中の下線部（ア）〜（オ）に関する文章を読み、空欄（51）〜（52）（53）〜（54）（55）〜（56）に入る最も適切な語句を語群より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。

【1】幕末 撫夷の志士は、偏方の幕府向かって其力を館したり。如何にしても幕府を倒し、内国を王政統一の下に帰して、然らば、他事に及ばざる事を圖れり。苟も幕府を囲ししてむるに足るべきものは何事もも之を利用して。自ら進んで外交を為すとの思ありもにかわらず、垣は之を衰え、之を利用して以て幕府を追ふれり、何れも京に近い（51）〜（52）の関港と（53）〜（54）の開国に関しては幕府は如何に困難を極めしかるべきを知らず。志士は他の攘夷派とも力を併せて断然之に対して反対の意見を示せり。然るに慶応3年10月、将軍慶喜大政を奉還し、王政経に推新を告げるや、新政府は開国政策を宣言、英国の（55）〜（56）を始めとして各国の（55）〜（56）に参内詰見を詰むこととせり。慶喜は驚けり、攘夷党は驚けり、否率に天下は驚愕せり。蓋し、慶喜は従来新政府の人々を以て攘夷党なりと信じ、其党に反対する要旨は外交政策に在りしも、思はんやそれを今自ら進んで今一層急黒の手段を取られたばす。攘夷党は更に意外の感を知せり。彼等は新政府の人々を以て、皆応の党をとして仏透も尊王攘夷の主義を保持する者ならんと想惟し、信をえて救援を幕府を圧したる程なりしに、何ぞ囲らん。其の人々は、敵、と想惟し幕府より更に一層反対なる政策を執るに至たりたればなり。

【2】德川幕府既に攘夷に帰し、太政親政の古に復せしも雖も、号令制の権威は略未だ中央政府に集まるに至らず、群雄論方割裂して尾大不掉の強悪を呈し、ややもすれば第二の幕府を生出せるとする情勢なり。是は実に封建制度の依然として存するの急をききて、苟も其急を除きて「王政復古」の実を挙げ、「維新革命」の業を了さねば、速やかに、封建制度を攘夷して（57）〜（58）の発端を消せざるべきかざる。然れども（57）〜（58）は至難の問題となり。此時に当り、我に攘夷の手を枕せし山県有朋は、彼々余らと其志を同はし、此情勢を見て「西郷が余らと共に諸般の改革を決行せんと欲するかを確かめ、然る後何れもくも処決するの外ならん」との議を発し、井上馨も之を賛し、山県は直ちに西郷を訪り。共計説を告げて、最後の決断を聞かんことを迫られり。西郷は、「余は書に先言を増せざるのみならず、万一にも未然を唱える諸々ありもせば、却って衆に平平して、千両を動かして之を確に」すると、と申いて、共心事を吐露せしめ、形勢も急の間に一変して平穏静謐たる深く顧慮するを要せざるに至り。此事に関しては木戸、大久保の先輩番老も割りて力なきにあらずと雖も、偏に山県、井上の両人の功労をと謂わざるべきかす。
（ウ） 擁賈志士として活動した（69）（70）は、自ら隊長となって脱藩義士や家康などをメンバーとして1868年に幕府のひとつを組織して戊辰戦争で新政府軍に参加し、年貢半減令を掲げた。のちに彼は新政府によって幕府軍とされて処刑され、同様に解説された。同年には、土佐藩兵がフランスの水兵に発砲するという（71）（72）事件が発生し、同じ頃には（65）（66）が襲撃された。のちに大岡昇平は、この（71）（72）事件をテーマとした小説を書いている。

（エ） 全国を政府の直轄地にする（57）（58）が断行された年、当時の行政制度であった太政官制が改められ、太政官は最高意思決定機関である正院、立法調査関係である左院、行政調査機関である右院によって構成されることとなった。1869年に、各藩主が土地と人民を朝廷に返上した改革の後に制定された官制である（73）（74）では、外交関係、臣事関係、司法関係をつかさどる各機関が改編された。

（オ） この回想の語り手である（75）（76）は、明治初年から政府中枢で要職を歴任し、西郷隆盛、山縣有朋らとともに参議を務め、財政通として近代産業の育成に努めた。在野においては政党を結成し、内閣制度発足後は外務大臣を務めた人物として知られている。その葬儀は国民葬として行われた。

【語彙】

01. アーネスト＝サトウ 02. 赤坂 03. 坂路 04. 池田屋
05. 一番町 06. 井上清直 07. 岩瀬忠震 08. 内村鑑三
09. 樽本武揚 10. 大歳重信 11. 大坂 12. 大津
13. オールコック 14. 岡山 15. 外国官 16. 外国奉行
17. 海防掛 18. 海防參與 19. 外務卿 20. 外務大臣
21. 藤義邦 22. 加藤高明 23. 川路聖謨 24. 公使
25. 神戸 26. 西巖寺 27. 鈴海寺 28. 城
29. 坂本龍馬 30. 相楽長三 31. 三院制 32. 三箇
33. 三新法 34. 七科 35. 轟沢栄一 36. 首相
37. 書記官 38. 新見正興 39. 泉岳寺 40. 善福寺
41. 副島種臣 42. 大使 43. 竹内保徳 44. 武田耕雲斎
45. 武市半平太 46. 地租改正 47. 長応寺 48. 微兵令
49. 津 50. 敦賀 51. 寺島宗則 52. 寺田屋
53. 東禅寺 54. 永井尚志 55. 中江兆民 56. 名古屋
57. 生麦 58. 奈良 59. 二官六省 60. バークス
61. 蒼刀令 62. 魔藩置県 63. 八局 64. ハリス
65. 薩籍奉還 66. 姫路 67. 平野国臣 68. 福沢諭吉
69. 麓田醤谷 70. ポンペ 71. 舞鶴 72. 陸奥宗光
73. メーチニコフ 74. 順事 75. ロッシュ 76. 和歌山

[1] ポツダム宣言体制が憲法改正の要求をも含むものであるということを日本側が知るようになるのは、1945年10月、マッカーサー元帥が当時の内閣の総理であった（77）と会見し改正を示唆したときである。パリーは、戦争末期の同年2月、戦争の継続が日本の共産化を招くとして早期終結を上奏したことで有名であり、マッカーサーとの本会談が実現したのである。この会観の当日GHQは、「政治的公立民の及び宗教的自由に対する制限の撤廃に関する覚書」を発表するが、その実行が困難であるとして翌日内閣は総辞職したことから（77）も国務大臣の地位を失った。しかし、新憲法の下で彼は（79）の御用掛に任じられ憲法改正案起草の準備を進めてゆく。

[2] 新憲法に対してもマッカーサーは、「『ポツダム』宣言ノ実現ニ当リテハ日本国民カ数世紀ニ亘リ隷属セリメセラレタル伝統的社会秩序ハ是正セラルヲ要スノ意見ヲモノニハニシテ政治的自由ヲ包含スヘントノ話ハ口頭で表明した。当初、首相は憲法改正には消極的であったといわれるが、臨時閣議において憲法改正問題に関係する研究を始めるに決し、時の国務相松本藤治を長とし、当時の著名な憲学者を顧問や委員に迎え（81）が設置されることになった。

[3] はいゆる松本私案と呼ばれる憲法改正案をGHQに提出するが却下される。その様子は米陸軍中佐ラウエルが以下のように記しているが、マッカーサーは予め総司令部内の（83）に対し、憲法改正案を作成する旨を指示していたのである。

「先日議会が提出された憲法改正案は、自由と民主主義の文書として最高司令官が受諾するには全く不適当なものである。しかしながら、最高司令官は、過去の不正と専制から日本国民を守るように自由かつ開明的な憲法を日本国民が望んでいるという事実に鑑み、ここに持参した文書を承認し、これを日本の情勢が要求している諸原理を体現した文書として諸君に手渡すよう命じられた。

この諸原理とは、「天皇は選挙者ではなく元首とする」、「戦争放棄と軍備廃止」、「封建的諸制度の廃止」といった三つの原則に定義され、GHQ側から日本側に手渡された文書とは、この三原則の上に立った憲法の改正草案であった。

[4] 日本政府はGHQによる憲法改正草案に基づき幾多の修正を加えてから政府案を起草する。この案は憲政院の諮問にかかわり、内閣によって帝国議会に提出される。その後、貴族院、衆議院における審議を経て日本国憲法として成立する。この衆議院の審議において（85）衆議院議長（86）責任は、議院改革案（87）（88）の質問に応え、いわゆる「非武装平和」の理念を示したが、第9条第2項の「陸海空軍その他の軍力は、これを保有しない」の前に「前項の目的を達成するため」という文言が追加されることになる。これは、当時衆議院において憲法改正案を審議する特別委員会の委員長を務め、後に民主党結成に尽力した（89）（90）の発案にかかるものだが、その趣旨は、戦争、武力の威嚇・行使を永久に放棄することを規定した条項第1項を前提にしながら、自衛のための戦力保持の可能性を残すところにあったと理解されている。
（ア）この覚書は、いわゆる[91]|(92)とも称され、治安維持法や特別高等警察の発足、共産党員をはじめとした思想政治犯の即時解放を求め、当時の内務大臣を初めとした警察関係首脳部の一斉罷免を要求する内容を有していた。

（イ）この[(79)| (80)]とは、1885年の内閣府の発足に際し、閣外にあって天皇を直接補佐する宮中職が復活したことにおよんで設置された機関である。この機関は御書・国書の保管や、詔勅・勧告などの宮廷文書に関する事務を所管し、その初代の総裁者は幕末期に急進的な尊鎖派として長州に七御落しが[93]| (94)が務めた。なお[(77)| (78)]を中心とした改憲作業により、1945年11月に草案が上奏されたが、この草案は同月の[(79)| (80)]の廃止により日の目を見ることができなかった。

（ウ）この改正案は、天皇の不可侵な神聖性を導く大日本帝国憲法第3条を、「天皇至尊ニシテ特権スヘカラス」と若干字句のうえで改めることを踏まえた。だが、第4条が規定する統治権の総権者としての天皇の位置づけについての言及は見られず、天皇の大権規定にはほとんど触れられないままの改正があおられた。この改正案の作成に顧問として加わった[(95)| (96)]は、かつてはその主張する学説が反国体的であるとの批判を受け貴族院議員を辞任したが、戦後は早急な憲法の制定には反対の立場をとっていた。

（エ）C13Qは民間の憲法私案にも注目し、社会統計学を推進した[(97)| (98)]の呼びかけで森戸戸民ら学識経験者が起草した[(99)| (100)]が、主権在民を謳い、直接民主主義を採用し、かつ社会権についても規定していたことを高く評価し、これを草案案のモデルとしたといわれている。

（オ）[(87)| (88)]は戦時中、中国に関て日本に対する反戦運動を組織していたが、終戦後、帰国し日本共産党の再建に参加する。1946年、衆議院議員に当選し、共産国会議員団長として活動するが、1950年、マッカーサー指令により公職追放される。

【語彙】
01. 萩原真
02. 安田能成
03. 石橋浩山
04. 伊藤博文
05. 犬養毅
06. 岩倉具視
07. 岩田寛造
08. 上杉慎吉
09. 外交局
10. 笹克彦
11. 片山哲
12. 桂太郎
13. 川島武宜
14. 菊池武夫
15. 極東委員会
16. 清宮四郎
17. 宮内省
18. 宮内府
19. 憲法改正要綱
20. 憲法研究会
21. 憲法草案要綱
22. 憲法大綱
23. 憲法調査会
24. 憲法問題調査委員会
25. 元老
26. 国際検事局
27. 国防保安法
28. 五大改革指令
29. 近衛文麿
30. 西園寺公望
31. 佐々木喜一
32. 三条実美
33. 参謀本部
34. 志賀義雄
35. 重光葵
36. 市原喜重郎
37. 人権指令
38. 新憲法要綱
39. 神道指令
40. 鈴木貫太郎
41. 制度取調局
42. 高野長三郎
43. 深川幸辰
44. 団体等規正令
45. 帝国憲法改正草案要綱
46. 東郷茂徳
47. 徳大寺実則
48. 徳田球一
49. 内大臣府
50. 日本共産党憲法私案要綱
51. 日本憲法見込案
52. 野坂参三
53. 岩本一郎
54. 東久邇宮稔彦
55. 平沼騏一郎
56. 伏見富貴愛
57. 法制局
58. 法務局
59. 法律取調委員会
60. 稲葉八束
61. 松岡洋右
62. 美濃部達吉
63. 松沢俊義
64. 岡本順治
65. 民政局
66. 山川均
67. 吉田茂
68. 臨時法制審議会